

しおんだより VOL.5



薬剤部は薬を準備しているだけ！？

病院に通院、入院されている方で、お薬をのんでいない方はいらっしゃいません。お薬は、医師が処方の内容を決め、薬剤師が準備をして、お渡ししているだけと思われている方もいらっしゃるかも知れません。確かに、以前はそういった傾向も強かったのですが、今は、変わりました。

一番大きな違いは、薬剤師が「お薬をお渡しするまで」ではなく、「お薬をのんだ後まで」。担当するようになったことです。

「医師も看護師も見ているのに、なぜ、わざわざ薬剤師が！？」と思われるかも知れません。しかし、高齢の患者さんにおいては、現在の症状の原因が、今、のんでいる薬にあることもしばしばあります。医師はどうしても、病気が原因と考えてしまうので、患者さんが何か症状を訴えるたびに、薬が増えてしまいます。

そんな状況を避けるために、薬剤師が入院中の患者さんも継続的にみせて頂き、患者さんの状態を、医師や看護師と共有しながら、処方内容をよりよいものにしていきます。食べられない、歩けない、ふらつくといった症状が、服用している薬で起こっていないのかどうかを、血液検査データも一緒に見ながらチェックし、必要があれば医師にフィードバックしていきます。

岸薬局長・永井副薬局長を中心に、薬剤師だけでなくパートナー、事務スタッフがチームを組んで、患者さんの薬物治療をトータルにサポートしています。

薬学的専門性を活かして、様々な現場で活躍しています



最近では、点滴で栄養を補ったり、抗がん剤を投与したりと、薬物治療の内容は多岐にわたってきました。また、新しいお薬が、どんどん開発され実用化されてきた中で、薬剤師がフォローを行うことは、安全・安心の医療を受けて頂くためにも欠かせません。

また、当院では褥瘡（とこずれ）の治療にも、薬剤師が積極的に関与しています。褥瘡の治療の方法には、色々なものがあります。予防やケアと並んで、薬剤の内容だけでなく基剤（軟膏、クリーム、ゲルなど）についても最適な選択をしていくことが、治療を進めていく上では欠かせません。時には、薬剤師自身が褥瘡の状態も確認しながら、医師や看護師、管理栄養士等とも連携しながら、褥瘡治療に取り組んでいます。

これらの他にも、栄養サポートチームや緩和ケアチームなど、多職種が連携して治療に当たるチームの中でも積極的に活動する一方、入院・退院の際には、地域の薬局の薬剤師とも連携を深めるなど、その現場は、どんどん広がっています。

薬剤部を支える「パートナー」と薬局事務

このような「薬をのんだ後まで」の活動を薬剤師が行うためには、「お薬をお渡しするまで」の仕事を、できるだけ整理、機械化して、薬剤師ではないスタッフが支える仕組み作りが重要になってきます。

当院では、調剤業務を薬剤師と連携して行う3名の「パートナー」と大切な薬の発注や在庫管理を含めた業務を行う薬局事務スタッフが1名在籍し、薬剤師の対人業務活動を支えています。

これからも皆様に信頼される病院運営を実現するためにも、薬剤部の活動の現場は、どんどん広がっていくことと思われます。



当院では、パートナーの活動が不可欠です。

しおんだより 第5号 発行日：令和3年3月15日

発行人：狭間研至 発行元：医療法人嘉健会 思温病院

☎557-0034 大阪市西成区松1-1-31 電話06-6657-3711 HP: www.shion-hp.or.jp